

真の国際人とは？

2005 年に出版され、260 万部の大ベストセラーとなった「国家の品格」の中で、「国際人」について、著者の藤原正彦氏は次のように述べています。

英語というのは話すための手段に過ぎません。国際的に通用する人間になるには、表現する手段よりも表現する内容を整える方がずっと重要なのです。英語はたどたどしくても、なまっけていてもよい。内容がすべてなのです。そして内容を豊富にするには、きちんと国語を勉強すること、とりわけ本を読むことが不可欠なのです。

(中略)

ロンドン駐在の商社マンが、あるお得意さんの家に夕食に呼ばれた。そこでいきなり、こう聞かれたそうです。

「縄文土器と、弥生土器はどう違うんだ？」

「元寇というのは二度あった。最初のと後ものでは何が違ったんだ？」

その人が言うには、イギリス人には人を試すという陰険なところがあって、こういう質問に答えられないと、もう次から呼んでくれないそうです。

「この人は文化の分からないつまらない人だ」

となる。すると、商談も進まなくなってしまうらしい。

今の 70 歳以上の日本人で、英語をうまく話せる人はあまり多くない。海外へ行った彼らの多くは仕方なく、にこやかに微笑んでいました。だから欧米の人たちは、

「日本人は胸の底に深いものを持っているらしい」

と伝えてくれました。

ところが、最近の若い人たちは、内容は何も無いのに英語はペラペラしゃべるから、日本人の中身が空っぽであることがすっかりバレてしまいました。内容がないのに英語だけ上手いという人は、日本のイメージを傷つけ、深い内容を持ちながら英語は話せないという大勢の日本人を、無邪気ながら冒涇しているのです。「内容ナシ英語ペラペラ」は海外では黙っていてほしいくらいです。

また、神戸女学院大学名誉教授で、ベストセラー「日本辺境論」の著者、内田樹氏は、世間でいう「国際人」を「英語が話せて、外国人とタフなネゴシエーションができて、外国の生活習慣にすぐ慣れて、辞令一本で翌日海外に飛べる人間」と表現しています。また、そのような人材を、「いくらでも替えがいる人材」「会社にとって都合のいい人材」と述べ、そのような人材を大量生産しようとしている日本の教育に警鐘を鳴らしています。

学校の勉強や英語ができれば、子どもたちは幸せな人生を送ることができるのでしょうか。BB塾では、学校の勉強に加えて、「実学講座」を開講しています。日本の文化、世界の文化を学び、社会で活躍する大人の講話などを聴き、子どもたちが自分の無限の可能性を引き出せるようにしています。自らが生まれた日本のこと、世界のことを深く知り、世界中で必要とされる、「真の国際人」を育てる。それが当塾の目標です。